

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 阿部 裕

論 文 題 目

古代日本語における動詞接続の研究

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 釘貫 亨

委員 名古屋大学教授 町田 健

委員 名古屋大学准教授 宮地朝子

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、古代日本語における動詞増殖のきわめて有効なシステムの一つである動詞接続（連用形に別の動詞を重ねる：打ち解ける、取り持つ等）を取り上げる。論者は、これら動詞接続のうちで前項要素と後項要素が本来の語彙的意味を喪失して第三の意味に熟合して生じた「複合動詞（例：現代語の「取り立てる・打ち込む等）」が奈良時代語から存在したか否かの積年の課題を決着させることを意図して稿を起す。その目的を達するために論者は、序章において古代語における複合動詞の存在を否定した金田一春彦に始まり現代語における複合動詞に至るまでの研究史を検討吟味して、現状における方法論批判を整理して提案する。その結果、動詞接続の前項および後項の接辞化は、「複合動詞化」のプロセスを経ている可能性が高いこと、また現代方言研究を引用しながら複合動詞化しているか否かの要因がアクセントのみからは決定できないことを割り出している。

第1章において論者は、上代語における「トリ」を前項要素とする動詞接続を取り上げて、「トリ」が接頭辞しているか否かに注目し、「取る」単独例と接続の例を考えられる限り多様な文法構造の中で比較する。その結果、論者は、目的語を伴う「トリ＋他動詞」は二格を取ることが多く中でも「取り持つ・取り佩く」において顕著である。目的語を伴わないトリ他動詞では、特殊な意味に固定化している例が観察される。またトリ自動詞の例中に接頭辞化したトリが観察される。その上で、論者は、複合動詞化を経ている可能性が高い接頭辞化したトリの成立過程を「取り持つ」を契機とした複合動詞化現象があったと結論づける。

第2章において論者は、第1章と同様の方法によって中古語のトリ接続動詞を観察する。その結果、中古語においては、上代語に比べて前項トリが持つ本来の意味が希薄化して接頭辞化の進行した動詞群が多数出現してきたと結論する。

第3章において、論者はトリー接続動詞の分析で得た結論を元にして上代におけるウチー接続動詞群の用例が複合動詞化を実現しているのかを検討する。論者によれば上代におけるウチー接続動詞において、明らかに接頭辞化した用法を持つ「うちはへて」や枕詞「打ち靡く」の多数の用例の存在からウチー接続動詞の中から確実に複合動詞化が進行していたとする。ウチの接頭辞化のプロセスにおいて、特定の単語から類推を生じて他の単語にウチ接頭辞動詞が生産される段階があったとする。

第4章では、中古語におけるウチー接続動詞を観察した結果、上代よりもより多様で個性的なウチー複合動詞が多数観察されるとしている。

本論文の結論として、論者は従来から古代語における存否が問題とされてきた複合動詞が8世紀において確実に存在していたこと、そして複合動詞の造語が中古語において確実に増加しており、複合動詞という通言語的に見てもユニークな性格を持つ動詞造語法が古代語の段階で成立したとする。最後に今後の課題を提案している。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

「取り持つ」「打ち込む」のような既存の動詞連用形に別の既存の動詞を連結させて全く意味の異なる第三の新動詞を産出するシステムは、「複合動詞」と呼ばれて日本語のユニークな特徴であることが知られている。論者は、現代語でも盛んに行われる日本語独自の造語法に注目して、それが既存の動詞の単純な積み重ねではない第三の動詞に変容する過程を古代日本語の観察を通じて解明しようと試みた。古代語において厳密な意味での複合語は存在しないという説が金田一春彦による中古語アクセント分析の結果、不動の鉄案とされてきた。ところが近年、複合動詞内部に複数のアクセント核を有する石川県白峰方言の存在が報告され、「定説」に疑義が表明されるようになり、改めて古代語における複合動詞の存否の問題が取り沙汰されるようになった。

かかる論争的状况に際して、論者は徹底したテキスト解釈的分析法によって、上代語に複合動詞が存在することを明らかにした。論者によれば、単純な動詞接続から複合動詞に至るには、①動詞の接続が慣用的に使用される段階、②同じ後項を有する接続が前項と後項がそれぞれ別個の動詞として機能する段階、③前項要素が接頭辞である段階、が必要であるとし、上代語資料によれば、「取り持つ」がそのすべての性質を具有していたことを論証した。論者の方法の独創的な点は、「取り持つ」が起点となって接頭辞トリの用法が他の動詞に類推的に拡大して、これがトリ複合動詞化を促進したキーワードであることを割り出した点である。論者の手堅い考証によって、既存の動詞を資源としながら全く新しい複合動詞が造語されるプロセスが説得力を以て論理構成された。論者の成果は、学界で注目され古代語における複合動詞の存在が確定した。論者の手法は、従来の研究が複合動詞であるか否かの現象的判定のみに偏っていたことに対して、現代語研究の成果を援用しながら動詞接続から複合動詞化の段階的プロセスを論理的に解明したことである。この観点は、今後資料が大幅に増加することが予想される中古以降の研究の展望を拓くことになる。

本論文の問題点としては、トリ複合動詞で取り出された「取り持つ」のような強力な影響力を持つキーワードがウツ複合動詞においては必ずしも明らかにならなかった点である。この点が本論文の後半部分の推論をやや抽象的な議論に陥らせている。しかしながら、この点は中古語以降の研究の展開で多様な種類の複合動詞を観察する過程で容易に克服されるだろう。

本研究は、意味論的な分析によるとはいえ、考証はきわめて手堅く慎重で、説得力を備えた妥当な見解に至る模範的な性格を備えている。今後は、動詞連用形を駆使した接続という日本語独自の造語法が何故発達したのか、動詞造語全体の中で歴史言語学的に位置づけることが期待される。

以上のことから審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位にふさわしい水準を備えた業績であると判断した。